



虫追い

天草市河浦町一町田 1972年撮影 35mmカラーポジ

かつて、害虫の発生は悪霊の仕業と考えられていました。それでこれをムラの外に追い出して虫の害が少ないように祈る、虫追い・虫送りと呼ばれる行事が各地で行われていました。しかし農薬などによって虫害が減ったことにより次第に行われなくなりました。

天草地方では現在でも虫追い祭が行われています。天草の虫追い祭は太鼓踊りが登場するのが特徴ですが、一町田の虫追い祭では虫追い旗が登場します。7月中旬の日曜日、午前中に一町田八幡宮で神事と、川に設けた祭壇で川祭りが行われ、午後から虫追いが行われます。十数メートルもなる孟宗竹の竿に五色の布を付けたものを持ち、鉦や太鼓を打ち鳴らしながら行列を組んでムラの田んぼを廻ります。最後は一町田川の堤防を川下に進み、村境の一町田橋の上で鉦や太鼓を打ち鳴らして虫を海の方に追い出し、豊作を祈ります。



精霊流し

山鹿市 撮影年不明 35mm カラーポジ

山鹿市では新暦7月に盆行事を行っています。15日の夜、初盆を迎えた家では麦わらや竹で精霊舟を作り、菊池川の山鹿大橋付近から火を放って流していました。中には数人がかりで運ぶ大きな舟を造るところもありました。精霊流しは盆を迎えた祖霊を送るもので、川や海に流すのは常世の国あるいは極楽浄土は海の彼方にあるという信仰からきています。

ところでお盆とは本来7月の行事ですが、現在は8月に行うところが多いようです。今私たちが使っている太陽暦（新暦）は太陽の動きを基に一年を365日に分けたものですが、昔は太陽の動きと月の満ち欠けも基にした太陽太陰暦（旧暦）を使っていました。新暦は旧暦よりだいたい1か月くらい早くずれているため本来の行事の季節感とずれるうえ、新暦の7月15日頃はまだ農繁期でゆっくりお盆を迎えることができないため、1か月遅れで行うことが多くなったのです。



七夕綱

葦北郡芦北町白木 1972年撮影 35mmカラーポジ

八代・葦北地方には、七夕綱という珍しい風習があります。白木では8月6日の夜に青年たちが稲藁で人形、大きな草鞋、草履わらじ ぞうり、馬、タコなどをつくり、長い綱に吊して、集落を流れる川をまたいで張り、16日まで飾ります。この七夕綱には、災厄が入ってこないよう防ぐ意味があり、大きな履き物にはこれを履く大神が中にと示しているのだといいます。また、七夕の織姫彦星が逢えるよう、綱を張って渡してやるのだとも伝えられています。

日本の七夕は、日本でこの時期に行われていた水神祭祀や盆を迎える行事に、中国の伝説や風習が加わって現在の形になったといわれています。七夕綱については良く分かっていませんが、山から先祖の霊がこの綱を伝って降りてくると伝える地区もあり、盆に祖霊を迎える場を清浄にするため、悪霊を防ぐ意味合いなどを持っていたと考えられます。



七夕棚

天草市深水町 1982年撮影 35mmカラーポジ

深水町では7月6日の満ち潮時に、竹をカズラで編んだ棚を庭に作ります。これは、タナバタタナと呼ばれています。棚にはお神酒やダゴ、野菜、果物を供え、短冊を下げた笹竹を立てます。この竹にはタナバタサマと呼ばれる神様が宿るとされています。7日は棚に置かれた供え物や庭の果物を勝手にとってよいとされ、子どもたちはタナサガシといって、家々を廻り、供物を頂いていました。短冊を飾った竹は15日午後の引き潮時に笹部分を切って流し、残りは物干し竿にしました。

七夕棚は神様を迎えるための祭壇ですが、盆の精霊棚と形態がよく似ています。県内には7月7日をタナバタボンと呼ぶ所もあり、多くの所で盆を迎える準備として墓掃除をする日とされていました。熊本県南部には、七夕飾りを目印に精霊様が帰ってくるという伝承などもあります。七夕棚は七夕と盆がひとつながりの行事であったことを推測させる貴重な習俗です。



オトリコシ

阿蘇市波野赤仁田 1976年撮影 35mmカラーポジ

県内には、盆の間だけショーリョーダナ、セガキダナといって臨時の棚を設けるところがあります。赤仁田では、盆前に10戸ほどが一軒に位牌を持って集まり、僧を呼んで読経してもらい一緒に供養する、オトリコシという行事が行われます。この時、縁側に竹を組んで棚を作り、経の文言などを書いた五色の短冊をさげ、位牌を置き、ご飯や煮しめなどを供えます。

盆に、仏壇と別に棚を設けて先祖の霊を祀る風習は全国的にみられます。棚の形は竹を組んだもの、杭や柱に板を渡したもの、吊り棚、台などがあり、それらを置く場所も仏壇の前、床の間、縁側、庭先など、地域によってあるいは家によって様々な形態がみられます。似たような形態の棚は正月にも年棚、年徳棚といって作られます。正月と盆は共に先祖霊を迎えて祀る同じ意味合いを持つ行事であったと考えられています。



盆の仏壇

天草市有明町大浦 1982年撮影 35mmカラーポジ

大浦地区では8月13日の満ち潮時に、仏壇に先祖の霊を迎えるための飾りつけをします。仏壇の上に竹を横に吊り、葉の付いたままの里芋と、栗・柿・椎など実の成っている枝を2組ずつ用意して竹の両側に掛け、その間に色をつけたそうめん2束と、小さい提灯をさげます。そうめんは糊で貼ってのれんのようにする家もあります。仏壇の前には、ダゴや御飯、家でとれた野菜果物などを供えます。

日本には、正月と盆を一年における重要な折り目とする考え方があり、その時には先祖の霊が私たちに幸いを授けに訪れると考えられていました。そのため満月の夜に先祖の霊を迎え、供物を捧げて祀り、家の繁栄や作物の豊饒などを祈る先祖祭りをしていました。現在の盆行事は、この習俗に仏教の盂蘭盆会が合わさったものと言われています。盆の仏壇の飾りや供物には、古来の先祖祭りの姿が今も残っています。



地蔵祭り

熊本市北区植木町田底 1977年撮影 35mmカラーポジ

7月又は8月の24日頃、県内各地で地蔵祭りが行なわれます。地蔵は子どもを守る仏様とされ、子どもたちが中心となって行っているところが多いようです。

植木町芦原地区の地蔵祭り、別名チンカン祭りは県内では珍しく11月24日に行われます。上方と下方両地区とも、子どもたちが中心となって準備が進められます。数日前から、男の子は女竹で地蔵の回りを囲む大小の垣や花立てなどを作り、女の子は野菊の花を集めて1m位の糸に通したものを数十本作ります。祭の前日には、地蔵前に竹を組んだ門を作り、上部は杉の葉と菊花を飾り、下に菊花に糸を通したものを吊して花ののれんをつくります。地蔵を囲む垣の中はチンカン（ヤブコウジ）の赤い実を敷き詰め、地蔵の前に甘酒を入れたカケグリを供えます。当日は、地区の人たちがお参りに訪れ、子どもたちは一軒の家に集まってお茶とお菓子を貰い楽しく過ごします。



八朔のナスビウマ

熊本市西区池上町 1981 年撮影 35mm カラーポジ

県内では、八朔は田の神が仕事を終えて帰る日とされ、各地で、タノミ、サクダノミと
いって田畑にお神酒をあげて廻る習俗があります。また、県北地域では田の神様が乗って帰
るといってナスで馬を作ります。ナスビウマ、ハナウマなどといいます。

池上町では、新暦9月1日に八朔の祝いをします。午前中に家の主人が田畑にお神酒を
あげて廻り、稲穂一本と実がたくさんついたジュズダマを切って持ち帰ります。ナスかニガウ
リに4本足を付け、ジュズダマを目玉、トウキビの毛を尻尾にし、背に花や稲穂を立てた馬
を作って床の間に飾り、お神酒、尾頭付の魚、煮しめ、ダゴなどを供えます。夕方、馬と七
夕で飾った竹の笹葉部分を一緒に川に流し、田の神様を送ります。



十五夜綱引きの大草履

人吉市井ノ口町 1979年撮影 35mmカラーボジ

旧暦8月15日は、十五夜あるいは中秋の名月といい、月に供物をあげてお月見をする風習があります。多くの地域で供物に里芋が入ります。十五夜は別名「芋名月」とも呼ばれ、里芋の収穫を祝う意味もあったといわれています。

県の南部では十五夜に綱引きを行っています。綱引きは勝敗によって豊作などを占うという側面がありますが、十五夜の綱には竜蛇を象ったものも多いことから、綱の形で神を迎えてもてなし、豊饒や健康などを祈願する行事であると考えられます。

球磨地方では、十五夜の綱と一緒に草履や足半などの履き物を大きく作り、庚申塔や大木などに提げます。これは神様の履き物であり、十五夜の神様を迎える場を聖なる空間とするために、外から入ってこようとする悪霊を退ける意味があるといわれています。



白梅天満宮の風神大根

熊本市中央区細工町 1982年撮影 35mmカラーポジ

細工町三丁目の菅原神社（白梅天満宮）の祭りは11月15日です。祭の前日には、青年たちが境内で風神大根と呼ばれる料理を作り、参拝者に振る舞います。境内にすえた大きな鍋で、大量の大根の輪切りとゴマメを一緒に煮ます。これに、タカノツメをふんだんに刻んで入れ、醤油と酒で味を付けて三時間ほど煮込むと、真っ赤な大根の煮物ができあがります。とても辛いのですが、これを食べると風邪を引かないといわれています。夕方には多くの人が容器を持って貰いに訪れます。夜は、風神大根を肴に地域の人たちの親睦会が行われます。翌日の本祭では神社で神事が行われます。この日は七五三のお宮参りに訪れる人も多く、落雁や果物などが振る舞われています。



亥の子搗き

熊本市北区麻生田 1979年撮影 35mmカラーポジ

10月の亥の日を亥の子といいます。この日、県内ではイノコヅキ、イノコドン、ヨイトンゴなどといって、子どもたちが石に縄をつけたもので地面を搗いてまわり、餅などを貰う行事が行われていました。なお、亥の日が2回以上ある年は、初亥を祝うことが多いようです。

清水町麻生田では、子どもたちは前年から今年の亥の子までに男の子が生まれた家々を廻り、「亥の子、亥の子のこの晩に、餅搗かんもんはしわんぼう、おしんぼう、梅の花天神さん、梅の花天神さん、ここん息子は良か息子、ここん息子は良か息子、千年も万年も生きらすばい」と唱えながら地搗きをし、迎えた家では餅を配りました。イノシシが多産であることから、子宝祈願や子どもの成長を祈るといったものに結びついたようです。



大黒さん迎え

阿蘇市波野赤仁田 1975年撮影 35mmカラーポジ

阿蘇地方では、亥の子は田の神様が仕事を終える日という伝承があります。赤仁田では、大黒さんは1月11日に田に行かれて田の神になり、旧暦10月亥の日に田から家に帰ってくるといわれています。それで、亥の子の晩には家の前に大黒像を入れた斗杓と杵を箕に載せて臼の上に置き、里芋やゴボウ、昆布の塩煮、新大豆で作った豆腐、餅などの供え物をし、ろうそくを灯してお迎えしました。

昔はこの時期に稲の収穫が終わっていたことから、亥の子で田の神を祀る収穫儀礼が行われていたのでしょう。一方、県内の多くの地域で亥の子には餅を搗いて食べないとハエがいなくなるといわれ、また天草地方では正月の始まりの日とっていました。亥の子は一年の農耕を終え、新たな年を迎える準備期間に入る節目の日と考えられていたようです。



七五三

熊本市西区島崎 1965 年撮影 35mm カラーポジ

七五三は、男の子五歳、女の子三歳と七歳の時の11月15日に、健康や成長を願って社寺に詣でる行事のことです。ただし、この年齢と日付が全国的に定着したのは明治時代以降で、県内では今でも、男女とも数え年三歳でカミオキといって三つ身の着物に替わる祝い、数え年四歳でヒモトキといって四つ身の着物に替わり帯を締める祝いをする人が多いようです。

子どもの成長段階に応じて行われる儀礼には、かつては子どもが、氏子入りをして、地域社会のメンバーとして承認される祝いという意味も含まれていたもので、地域の氏神社に詣でるのが一般的でした。しかし、近年その意味は薄れ、子どもの無事な成長や無病息災、幸せなどを願って、信仰する神仏に祈る行事として定着しています。島崎のカトリック教会でも、七五三には我が子の幸せを願うたくさんの信者が訪れ、神に祈りを捧げています。



高橋のえびす祭り

熊本市西区高橋町 1993 年撮影 35mm カラーポジ

県内では、集落や地域にある神仏を座とか座組と呼ばれる組織で祀っているところが多いようです。中心となって世話をする家を、ザモト（座元）とかセツウ（節頭）、ウケマエ（受け前・請前）と呼び、座で行われる祭りを座祭、座を交代する儀礼を節頭渡しと呼んでいます。高橋町には、11月15日の高橋東神社（天社さん）の祭りの後にエビスマツリという座祭を行うところがあります。前座元宅の玄関に笹竹を二本立てて注連縄を張ります。家では、エビスの石像に供え物をし、組の人たちが集まって座祭りが行われます。祭りの終わりに、エビス像の前に新旧の座元が向かい合って座り、お神酒を酌み交わして交代の儀式を行います。その後、新座元はエビス像を抱え、旧座元は御幣を持ち、他の人は供え物などを持って新座元の家へ移動します。座敷にエビス像と御幣を祀ったら、再び夜遅くまで飲食を楽しみます。



杉水の節頭渡し

菊池郡大津町杉水 1983年撮影 35mm カラーボジ

杉水では、祭りの世話や神田耕作を5つの組で回して行っています。11月24日の座祭では、床の間に神田でとれた米と麦の種俵二俵、田植え綱や馬鍬などの農具を入れた長持、酒造りに用いられていた桶と混ぜ棒（エブリ）数本を並べます。前座元と世話人2名、次の座元と世話人2名の6名が向かい合って座り、縁に注連縄を結わえた三つの摺鉢に一升ずつお神酒を入れ、互いに飲み回します。翌25日にはお宮で神事が行われ、神楽が奉納されます。26日は「桶渡し」といって、床の間に飾ったものを次の座元の家まで太鼓を叩きながら送り、無事に受け渡しが済むと新座元宅で祝い酒となります。

座を交代する節頭渡しは、座祭りの中でも特に重要な儀礼です。その多くは、新旧座元の間で酒を酌み交わすことで成立するのですが、その器には特別な大杯を用いることも多いようです。



二の丸の神さん送り

熊本市南区海路口町 1982年撮影 35mmカラーポジ

熊本市南西部の座祭りは、節頭渡しの時に神さん送りといって、神に扮した新座元を皆で家まで送るのが特徴です。

海路口町二の丸北8、9組の座祭りは12月3日に行われます。その年の座元を本神さん、次の座元を新神さんと呼びます。座敷の上座に本神さん、新神さん、次の神さんの順に座って座祭りが行われます。祭りの最後に、本神さんと新神さんの間で節頭渡しの盃が交わされます。本神さんが着ていた袴と袴を新神さんが着て、襟に御幣を挿し、墨で鼻髭をべっとり描き、烏帽子のかわりに豆テボを被り、万歳をして席を立ちます。神様が土の上を歩かないようにとフゴやカマスに新神さんを乗せて二人で担ぎ、幟を先頭に新神さんの家に一同で送っていきます。新神さんの家に着いたら、襟の御幣を神棚に祀り、再び祝いの席が設けられます。



早鷹天神

菊池郡大津町引水 1984年撮影 35mm カラーポジ

県内には、森や大きな樹木を「天神」と称して祀っているところがたくさんあります。聖域にある中心的な樹木に、天から降りてきた神霊が宿るという信仰があり、この神の依り代である樹木の前で、様々な祈願や感謝の祭が毎年行われています。

大津町引水の中鶴地区では、森の中の榊の大木を神木とし、早鷹（はいたか）天神と称しています。祭日は本来11月5日ですが、今は11月25日の引水管原神社の祭りに併せて行っています。受け前組が大きな注連縄を用意し、神木に七巻半巻き付けます。割り竹で作った棚に供物を載せ、神社から受けてきた御幣を神木の前に立てて参拝し、組ごとに集まって宴席を設けます。

天神と呼ばれる神木に注連縄を七巻あるいは七巻半巻いて祀る形態は「巻天神」と呼ばれ、県内で多くみられます。注連縄をこのように巻く理由は諸説ありますが、分かっていません。



岩本の巻天神

菊池市旭志井利 1985年撮影 35mm カラーポジ

旧旭志村岩本の本村には、樹齢約800年という菊池市指定天然記念物の棕の大木があります。巻天神、棕天神と呼ばれ、三つの組に分かれ、世話役を回して祀っています。12月15日が祭日で、世話役に当たった組が直径約10cm、長さ約30mの大注連縄を用意します。幹の全面両側に竹を立てかけ、大注連縄を最初幹に一回巻き、二回目から両側の竹から竹へと七段に巻き、最期を幹の後へ巻いて止めます。注連縄を巻き終わると、お供えをして一同お参りのあと、座元宅で座祭りが行われます。夜は、天神の前で地元の神楽が奉納されます。本来は幹に注連縄を七巻半していたのが、幹があまりに太いため、前面だけを七段にして略式にしたもので、他ではあまり見られない形です。



山王神社の甘酒祭り

宇土市花園町 撮影年不明 35mm カラーポジ

花園町の佐野山王神社では、旧暦11月の申の日に甘酒祭りという一風変わった祭りが行われます。真っ赤な木綿の着物に黄色い帯を締め、白いほお被りをした若者たちが、徳利に入った甘酒を「ホーライ、ホーライ」の掛け声とともに奪い合い、徳利を振り回して甘酒を掛け合います。最年長は親猿、その下は小猿、新入りは新猿と呼ばれます。この祭りは山王の使いである猿に扮した若者が、神の霊力のこもった甘酒を振りまくことで、大地や人びとの穢れを祓い活力を与えているのだと考えられます。

山王神社の境内から始まり、数軒を廻って庭先で何度も甘酒を掛け合います。途中で新猿を胴上げして青年の仲間入りを祝ったりもします。それぞれの場所で、酒と料理が振る舞われるため、だんだんと酔いが回り動きも激しくなっていきます。